

学びを生かし，自分らしく 社会とかかわる児童生徒の育成



I 研究主題設定の背景

◇本校の実践上の課題

本校において、授業実践を進めていく中で、次のような課題を確かめた。

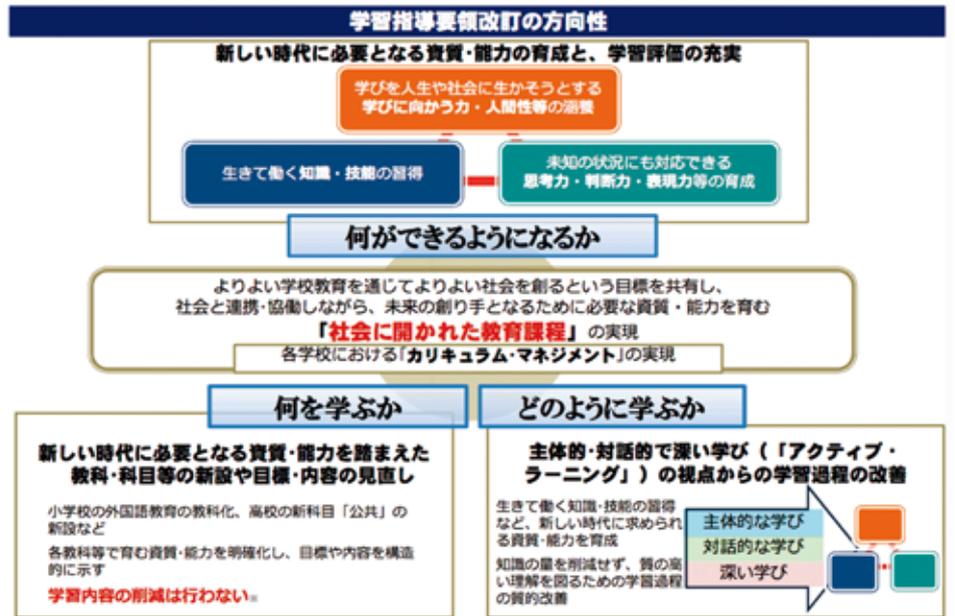
- 児童生徒の卒業後の具体的な生活を見据えながら、個別の指導計画等を作成し、授業実践を重ねること。
- 児童生徒の学びの積み重ねを蓄積したり、適切に評価したりできるようにしていくこと。



◇学習指導要領の改訂

学習指導要領の改訂を受け、改訂の主旨や方向性に沿った教育課程の編成と授業実践に向けて、本校での実態把握の仕方と個別の指導計画等の作成について、見直しが必要となった。

また、子どもたちが、何をどのように学び、何ができるようになるかを具現化した授業づくりや授業実践ができているのか、振り返った。



出典：平成28年12月 中央教育審議会

◇本校の実践上の課題

◇学習指導要領の改訂

本校の教育課程にある、「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」において、児童生徒一人一人が学びを積み重ねながら、「育成を目指す資質・能力」を身に付け、児童生徒を取り巻く環境や社会に自らの力で主体的にかかわっていくことができるようにすることを目指すこととした。



研究主題

学びを生かし、自分らしく
社会とかかわる児童生徒の育成



Ⅱ 研究の目的と研究計画

研究の目的

児童生徒の実生活や将来につながる学びの実現に向け、児童生徒の実態を適切に捉える方法や、各教科や各教科等を合わせた指導の授業づくりの考え方等について明らかにし、知的障害特別支援教育における確かな学びの実現を目指す。

研究計画（3年計画）

1年次

学習指導要領に対応した各教科の実態把握を活用した授業づくり

新学習指導要領に対応した「実態調査表」の作成と「実態調査表」を活用した授業づくりを行う。



2年次

実態把握から学習評価までを見通した各教科の授業づくり

把握した実態を基に、3観点での目標設定と評価を行う。
「各教科の授業づくりの過程」を具体的に示す。



3年次

教科の学びと関連付けた「各教科等を合わせた指導」の授業づくり

「各教科等を合わせた指導」の授業づくりの考え方について具体的に示し、各教科の授業と両輪として、実生活や将来につながる授業実践を行う。



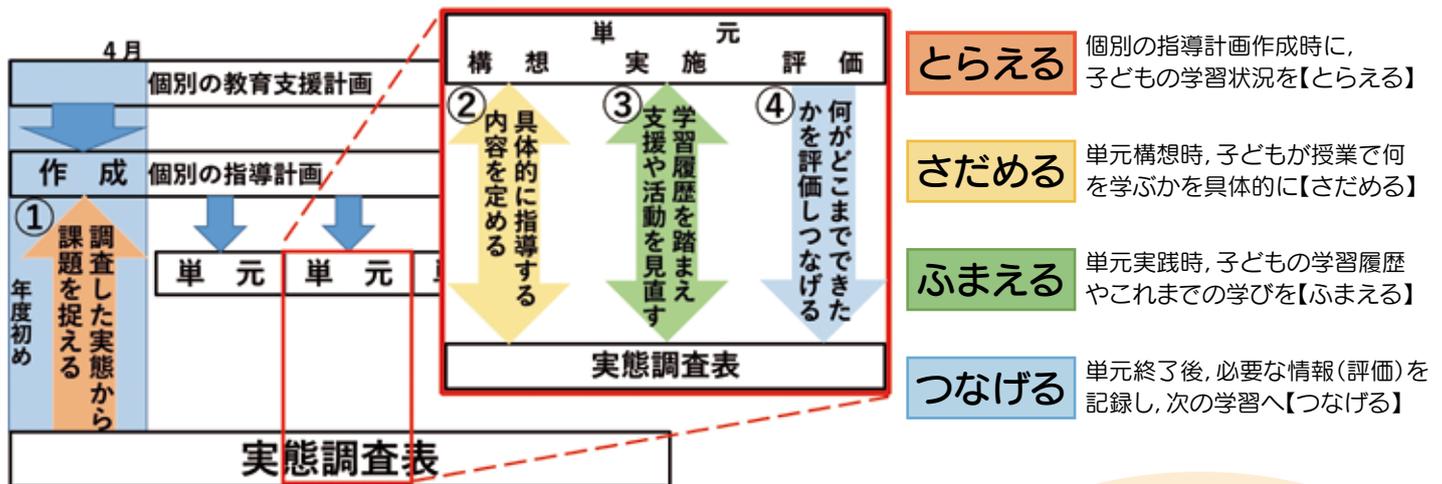
Ⅲ 研究 1 年次の取組

学習指導要領に対応した 各教科の実態把握を活用した授業づくり

- 新学習指導要領を参考にした実態調査表を作成し、子どもたち一人一人が何を学ぶと良いかを確かにして、授業づくりを行う。
- 授業実践をとおして実態調査表を更新する。



まず、本校としての実態調査表の位置付けを、次のように考えた。



作成した「実態調査表」の例と活用のイメージ

段階の目標	指導事項	調査項目	判定
<p>筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようになる。</p>	<p>目的に応じて、話題を決め、集めた材料を比較するなど伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。</p>	<p>目的に応じて、自分自身の興味や関心がある事柄や、経験などについて、話したり説明や報告をしたりしている。</p> <p>目的に応じて、質問やインタビューをしている。</p> <p>話そうと考えた事柄が話題やテーマに合っているかを確かめている。</p> <p>話したい事柄を決め、その理由や関連する事柄を追加したり、順番を整理したりしている。</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>△</p> <p>△</p>
<p>判定と調査時の様子(特記事項)の記入</p>			
<p>学習状況から指導事項を見極め、目標を設定したり、具体的な教材や支援員の作成に活用したりする。</p>			

学習指導要領に基づき、左から段階の目標、内容に記載された指導する事項を指導事項とした。調査項目は、学習指導要領解説を基に〈知識・技能〉〈思考・判断・表現〉の観点ごとに作成した。また、調査時の様子や判定を記すようにした。

〈研究 1 年次の成果〉

- 国語や算数などの実態調査表を作成、活用したことにより、個別の指導計画や単元計画を立案する際、根拠をもって目標や内容、観点別に身に付けて欲しいことを想定して、学習活動を設定することができるようになった。
- 実態を観点別に捉えたことで、一人一人に適切な指導内容を設定することにつながり、それらを踏まえた単元の計画と、個々に有効な支援を考えることができた。

〈研究 2 年次に向けて〉

- 「主体的に学習に取り組む態度」の目標設定と評価について考え、3観点での目標設定を行い、実際に見られた児童生徒の姿を3観点でどのように評価していくとよいか考えること。
- 実態を捉え、評価するまでの授業づくりの一連の流れを整理し、具体的に示すこと。

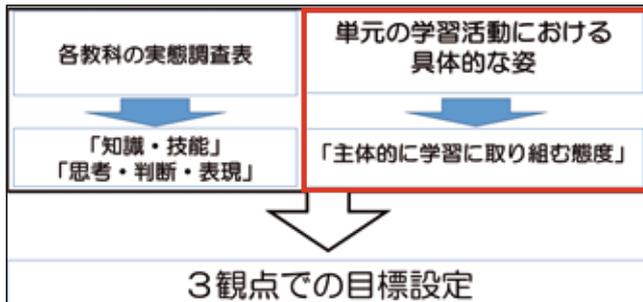
Ⅳ 研究 2 年次の取組

実態把握から学習評価までを見通した各教科の授業づくり

- 各教科の実態把握に基づき、3観点での目標設定と評価を行う。
- 本校としての授業づくりの考え方を、「各教科の授業づくりの過程」として具体的に示す。

3観点での目標設定と評価を行うために、昨年度までに作成・活用した実態調査表に加え、「主体的に学習に取り組む態度」の目標設定の仕方の検討を行った。そして、校内研究授業の実施と協議をとおして、次のような考え方を導き出した。

◇「主体的に学習に取り組む態度」及び、3観点での目標設定の考え方

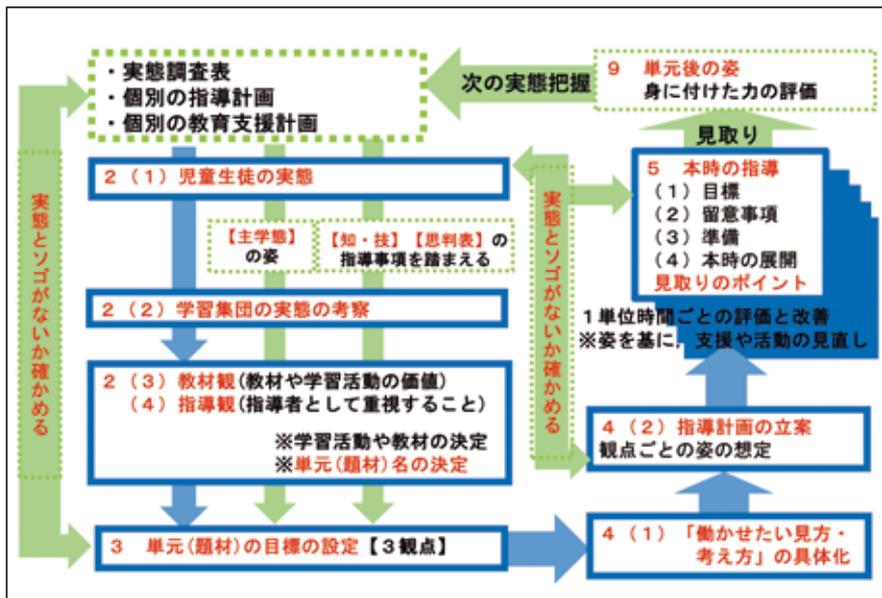


はじめに、児童生徒の特性、興味や関心、学習の様子などを踏まえて学習活動や支援を構想する。次に、構想した学習活動の中で、自分から課題や活動に取り組む姿として、具体的な姿、例えば図画工作科であれば、操作や活動を「繰り返す」、「自分から」色を重ねるなどを想定する。

こうした具体的な姿をキーワードにしながら、知識・技能の課題や指導する内容、思考・判断・表現として身に付けさせたい事柄を実態調査表によって導き出し、3観点での目標設定と評価をするようにした。

◇実態把握から学習評価までを見通した「各教科の授業づくりの過程」

前述した3観点での目標設定を含めた、授業づくりの流れを、次のようなフローチャートで表した。青の矢印と枠は本校の学習指導案の項立てとリンクし、緑色の矢印と枠は、授業づくりを進める際の留意点を表すようにした。（※下図は3年次修正版）



学習活動や支援について、設定した目標や見取った姿から改善する



「働かせたい見方・考え方」と観点ごとの姿を想定した学習活動の工夫

授業づくりの過程の中で、単元の指導計画における学習活動のつながりと学びの深まりに留意し、授業の方向性や位置付けを明確にできるように、「働かせたい見方・考え方」を指導計画に位置付けた。また、評価の場面を精選し、学習活動や支援を見直したり、改善したりできるように、3つの観点で引き出した児童生徒の具体的な姿を想定するようにした。こうした姿を基にしながら、本時における児童生徒の学びを見取るために、「見取りのポイント」として、3観点で具体的な姿を示すようにした。

〈研究2年次の成果〉

- 各教科の授業づくりの流れや考え方、授業づくりの際に留意することなどについて、「各教科の授業づくりの過程」として、本校としての考え方を具体的にできた。
- 3観点で実態を捉え、観点ごとに目標を設定し、授業における児童生徒の姿を多角的に評価したり具体的な姿から授業改善をしたりすることができるようになってきた。

〈研究3年次に向けて〉

- 実生活や就労に向けては、各教科の授業だけでなく、より実際の・実践的な場面での学習を構想・実施していくことが必要である。
- 「各教科等を合わせた指導」について、どのように目標設定や評価をしたらよいか（どのように教科の視点を取り入れるとよいか）や授業づくりの実際について、明らかにする必要がある。

V 研究3年次の取組

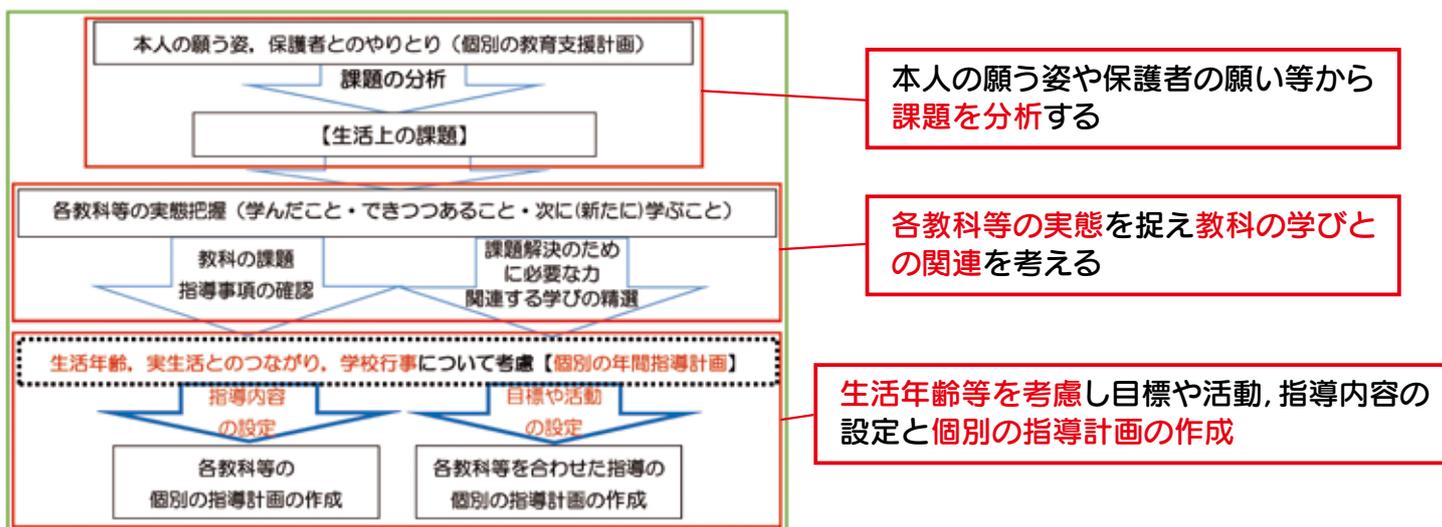
教科の学びと関連付けた 「各教科等を合わせた指導」の授業づくり

- 「各教科等を合わせた指導」の授業づくりの考え方について具体的に示す。
- 実生活や将来につながる学びとなるよう、各教科の授業とも関連付け、両輪とした授業実践を行う。

研究2年次までの成果や課題を踏まえ、「各教科等を合わせた指導」の授業づくりについて明らかにすることに取り組んだ。その中で、「各教科の指導内容」の取扱い方、「実生活や将来につながる学び」のための具体的な授業の考え方について、授業実践をしながら明らかにすることにした。

◇実態把握の考え方と流れの見直し

生活上の課題を捉え、その課題を解決するための学びとするため、実態把握の流れについて見直した。そして、生活上の課題や生活年齢とのつながり、教科の学びとの関連をより意識することが必要だと考え、次のように実態把握と個別の指導計画の作成について整理した。



◇生活年齢等を踏まえた、各学部の具体的な姿の想定

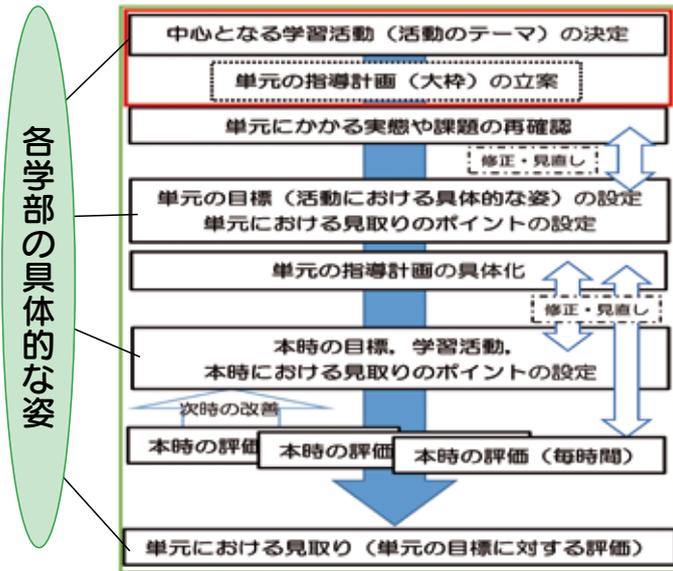
- 〈小学部〉**
「わかった」「できた」を増やし、自分なりの方法で、進んで活動に取り組む児童
- 〈中学部〉**
学んだことを結び付け、自分で決めた目標に向かって、他者と共に活動する生徒
- 〈高等部〉**
学んだことを発揮し、自分から課題を解決しながら、社会参加する生徒

実生活や社会生活とのつながりを明確にした授業実践とするため、各学部において、生活年齢等を踏まえた具体的な姿を想定した。

各学部の具体的な姿と関連付けながら授業実践を進める中で、実態把握や見取りなど、授業づくりとのつながり確かめたり、見られた姿がこの具体的な姿に近づいているかなどを考察したりするようにした。

◇「各教科等を合わせた指導」の単元化

実態把握の考え方の見直しと、各学部の具体的な姿の設定を受け、各教科等を合わせた指導の授業を具体的にするフローチャートを次のように整理した。



小学部
「おもちゃランドを
つくってあそぼう」



高等部
「安心・安全・笑顔の
カフェを開こう」

子どもにとっての単元のゴール(目的)を明確にした学習活動や活動のテーマを決定する。

◇単元の目標と教科との関連

単元の目標 (例)

名前	単元の目標	単元における見取りのポイント (指導事項)
Aさん	苗の根元まで土を入れるなどの留意点を自分で確認して寄せ植えを作ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> グループの友だちと工程ごとの仕上がりを見直してから、次の工程に取り組んでいる。 (職業家庭科 職業分野 中1段階Aア (イ)) 根から水分を吸収できるように、花の根が入る深さの穴を掘ったり、根元が隠れるまで土を入れたりしている。 (理科 中1段階Aア (ア) ②) 作業の工程の終わりを促して、ベルを鳴らしたり、教師の肩を叩いたりして教師に伝えている。(自立活動6 (4)) 手順に沿って必要な道具や資材を準備している。 (職業家庭科 職業分野 中1段階Aイ (ア) ②)
	苗の根元まで土を入れるなどの留意点を自分で確認して、寄せ植えを作ることができる。	
	単元の学習活動における具体的な姿を目標として設定する。	個々のねらいとして、関連する教科の学びについて明記し、姿を見取る。

(例) 苗の根元まで土を入れるという作業の留意点(意味)を捉えながら作業ができるように、理科の内容を関連付ける。



中学部
「きれいな寄せ植えを作って届けよう」

〈研究3年次の成果〉

- 授業を具体的にするフローチャートとして、授業づくりの過程を明確に示すことで、各教科等を合わせた指導の授業づくりにおいて、どのような手順で考えるのか、どのような事柄を大切にするとよいかのかが分かってきた。
- 単元のゴールを明確にして、学習活動を設定することで、児童生徒の主体的な姿を引き出すことにつながるようになった。
- 実態把握を生かし、「個々に必要な学び」という視点で、「各教科等を合わせた指導」においても、関連する教科の指導内容を明確に示し、個々の目標に迫ることができた。

〈更なる実践の充実に向けて〉

- 各学部で具体的な姿を想定し、その姿と関連付けた授業実践を継続する。また、授業づくりの過程の見直しや検証を行う。
- 児童生徒一人一人の育成すべき資質・能力を一層明確にし、どのような資質・能力を身に付けたかを、見取ることができるようにしていく。
- 計画的な単元の構想と実施、評価と改善を行い、教科別の指導と各教科等を合わせた指導、それぞれにおいて、バランス良く資質・能力を育成できるように、教育課程を見直していく。



こうした成果と課題を踏まえ、次年度に向けた教育課程の見直しや、計画的な単元の構想と評価等についての校内研究授業に取り組み始めている。

Ⅵ 3年間のまとめと次の研究実践に向けて

◇3年間のまとめ

3年間の研究実践を振り返り、次のような成果を確かめた。

- 実態調査表を基にした実態把握を土台として、児童生徒一人一人が「何を学ぶか」を適切に捉えることができるようになってきている。また、各教科や各教科等を合わせた指導の授業について、「授業づくりの過程」として、本校としての授業づくりの考え方を明確に示すことができ、児童生徒の一人一人の学びの充実に向けた基礎ができつつある。
- 観点別の評価に加え、「何が身に付いたか」という視点で評価することや、実生活や将来を見据えた具体的な姿を思い描いて、授業をすることが大事だと分かってきた。

◇今後取り組むべきことの考察

3年間のまとめを踏まえ、今後取り組むべきことについて、次のように考察した。

- 「授業づくりの過程」として、本校としての授業づくりの考え方の土台ができたことから今後も継続して取り組み、検証や見直しを行っていくことが重要ではないか。
- 児童生徒一人一人の将来の姿を思い描き、どのような資質・能力を身に付けることができるか考え、児童生徒一人一人が確かな学びを積み重ねられるような授業を行うことが必要ではないか。
- 実態を適切に捉えることができるようになったことから、実態差のある学習集団の中で学ぶ意義や価値、そうした授業の工夫等について考えることは、児童生徒の学びの更なる充実につながるのではないか。
- 単元を構想・実施・評価する中で、児童生徒が学んだことを実感し、発揮するなど、学びが有機的につながるような授業や教育課程の編成ができているだろうか。教育課程の見直しや改善の必要性があるのではないか。

◇次年度の研究実践の方向性

以上のことから、次年度の研究実践の方向性を次のように考えた。

- 児童生徒一人一人が確かな学びを積み重ねることができるよう、『個別最適な学び』や『協働的な学び』に着目する。その中で、実態を考察し、適切な指導計画の設定及び学習活動や支援の工夫、具体的な評価について考えるなど、個々の学びに迫ることができるようにする。
- 児童生徒一人一人の将来を思い描き、必要な資質・能力の育成ができるような、「教育課程の見直し」を行う。特に、単元間や行事とのつながりに留意し、学びが有機的につながるような教育課程の編成と見直しを行う。



群馬大学共同教育学部附属特別支援学校

〒371-0032 群馬県前橋市若宮町2丁目8番1号

電話 027-231-1384 F A X 027-234-4852

URL: shc.edu.gunma-u.ac.jp/ mail: shc@ml.gunma-u.ac.jp

